

2021年 8月 8日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「思い出して、泣いた」詩編 137編 高橋彰

詩編137編

1 バビロンの流れのほとりに座り
シオンを思って、わたしたちは泣いた。

2 竖琴は、ほとりの柳の木々に掛けた。

3 わたしたちを捕囚にした民が
歌をうたえと言うから
わたしたちを嘲る民が、楽しもうとして
「歌って聞かせよ、シオンの歌を」と言うから。

4 どうして歌うことができようか
主のための歌を、異教の地で。

5 エルサレムよ
もしも、わたしがあなたを忘れるなら
わたしの右手はなえるがよい。

6 わたしの舌は上顎にはり付くがよい
もしも、あなたを思わぬときがあるなら
もしも、エルサレムを
わたしの最大の喜びとしないなら。

7 主よ、覚えていてください
エドムの子らを
エルサレムのあの日を
彼らがこう言ったのを
「裸にせよ、裸にせよ、この都の基まで。」

8 娘バビロンよ、破壊者よ
いかに幸いなことか
お前がわたしたちに仕打ちを
お前に仕返す者

9 お前の幼子を捕えて岩にたたきつける者は。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

「バビロンの流れのほとりに座り」と始まるこの詩は、具体的な場所と時を表わしています。これは「バビロニア捕囚」という具体的な出来事に遭ったユダヤの人びとの嘆きの祈りです。

紀元前597年、新バビロニア(カルデア)帝国は南ユダ王国の都エルサレムを陥落させ、ヨヤキン王や主だった人びとを捕囚としてバビロンの都に強制移住させました。預言者エゼキエルもそのうちの一人だったと言われます。その後傀儡政権が建てられますが、結局586年、バビロニア軍の一年半にわたる包囲の後、エルサレムは完全に攻め滅ぼされ、ユダ王国は滅亡しました。国の主だった人々はバビロンに連行され捕囚となったのです。敗戦、強制移住、捕囚としての屈辱的扱い。ユダヤの民は社会的構造による暴力支配の中に置かれ続けました。差別的な言葉の暴力にも遭います。その苦しみはおよそ50年にわたる捕囚期を通じて、またその後帰還が許されて荒廃したエルサレムに帰ってしばらくも当然続いたのです。(ネヘミヤ1:4)。

捕囚の民は、ケバル川のほとりで集まって「座り」「泣いて」います。苦しみの時の長さ思い起こさせます。「そこ」は故郷から遙か離れた「異郷の地」(4)です。バビロニアの人びとからお前たちの神への賛歌を歌えと嘲られます。それはお前たちが信じていた神はどこへ行った、そのような神など信じていてもしょうせんバビロニアにお前たちは滅ぼされた。お前たちの神は無力で、神殿崩壊と同様に滅び、死んでいるのではないかという蔑みでした。捕囚民たちの最も深い苦しみは、主なる神は自分たちを、そして約束の地シオン、エルサレムを見捨ててしまわれたのか。もはや生きて共におられないのではないか、関わりを断たれてしまわれたのではないかという不安と失望感でした。そのような人びとにかつて神殿で奉唱されていた「主をたたえる歌」(詩編46等)を歌えようか。今は歌うまいと木々にかけた竖琴は、エルサレムから携えて来た

賛美の楽器です。川沿いに木が植えられ整備された都は繁栄の象徴です。そこでの生活は豊かであり強力で、人びとが満たされていたかもしれない。しかし彼らは「そこ」に埋没して生きることで、エルサレムを「思い起こし」て「嘆く」という仕方、なお神につながり続けようとしています。嘆きは現実に甘んじない大切な信仰の表現でした。神を「忘れ」ない、忘れるなら(演奏もする)右手も「なえて」(同語)しまえと口にします。厳しい現実や自分の無力さや嘆く心に逆らってでも、神を信じると誓うのです。誓う時は手でのどを掴んで言葉を発したのだそうです。エルサレムを忘れるなら、歌を歌うのどを窒息させてしまえばかりに。捕囚地で生きるための具体的な生活の不安、不安定な身分ゆえの保証のない不安は、人びとの無力さや自分たちの無価値さを味わわされます。しかしその無力さの中でなお人びとは神と向き合い、神に頼ることで生き延びる希望を持つとします。

7-9節は激しい怒りと復讐の言葉が連なります。バビロニアに連合してユダ王国滅亡に手を貸したエドム人たちの不義に対する怒りと憎しみ。そして自分たちを粉々に打ち砕いた暴力的なバビロニア帝国の軍勢力。暴力的で恐怖の力を振りかざす帝国主義の支配の残酷さ。捕囚の民は無力さを味わい尽くす中で、しかし彼らはその圧倒的な暴力の支配の力に抗って、神に祈ります。暴虐な支配体制が続くこと(お前の幼子)を神が打ち砕かれ退けられるようにと。弱者が神の正義を求める嘆きと叫びの声です。神の力や行為が目に見えぬ現実の中で、慈しみと憐れみ深い主、熱情の神を思い起こして叫び祈る。その神信頼の礼拝こそが、捕囚の民に生きる希望を与えたのでした。わたしたちもそのように祈り続けたいと思います。